

昭和二十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十九年四月二十八日運輸省特別授受認可第三五二號
昭和二十九年五月一日發行

第二十卷

五月號

淨土



蓮文

五月號

節操

現在三十代末から五十代にかけての人々には、戦時中朝日新聞の論説欄を一人で左右していた「杉山平助」なる名前を忘れ切れないであろう。

その当時、「杉山」の名は「東條」という名のジャーナリズム的代名詞の如くに用いられたものである。私共中老階級は防空壕の中で、ほしきものをかちりながらも、杉山の書いた片々二三十行の「うちてしやまん」的文章に飢をわすれたものである。

時代は移り、思想は大きく轉換した。かつて情報局といえ、戦争を正當化する頭脳であつた。その總裁をしていた緒方が、現在の副總理。而も、かつて戦争を鼓吹するペンを握つたその手で、今は民主政治の綱領を書く。——私は錯覺する。一休、日本はこれからまた戦争をおつ始めるんだ、と。

——そのようにかつての右が左になり、左が右になり、そして亦もとの、右が右に帰り、左が左に戻る。あゝ、何とやゝこしく、何と不可解なことか。行つて戻つて、その間に何をしたか、みんな口をぬぐつて語らない。

杉山平助——その人が生きてゐるか、死んでしまつたかは知らない。が、少くともそのままの名前では生きかゝつていない。いいことである。永遠にそうであつてほしい。そこに私は「節操」を感じる。節操とは、最少限度、自分の言つたことに責任をとることである。

現實の社會で、どんな人にも、要求されていることは、此意味での節操である。杉山平助の書いたことは間違つていたかも知れぬ。が、彼が生きかゝつて來ぬことは。正しい。

浄土

五月號

目次

救ひなき悲しみ

吉田絃二郎(1)

父の童話(講話)

幸田 文(4)

保育界の問題と佛教徒の自覺

内山憲尙(16)

愚鈍念佛に生きて

田中林助(15)

小消息 講義 本願への信順

佐藤賢順(7)

五月の節句

百田師惠(18)

新しい寺院の行き方(3)

(12)

釋尊物語(二)

山崎 宏(21)

「落日」の金畫演出をして

高瀬廣居(12)

ラジオ 落 日

須藤出穂(26)

救ひなき悲しみ



吉田 絃二郎

洋服に下駄穿き姿で散歩に出かけて行つた寫眞などを送つてくれた。かれとしては臥床生活八年振りのことであり、起死回生のよろこびであつたらう。

ところが原爆の残忍な惡魔的な放射能は、どこまで執拗なものであらう。この春のかれ

小學時代の長崎の友人からのたよりをもらつたのはお彼岸すぎのことであつた。友人は浦上の病院で患者を診察してゐた際、患者もろともあの恐ろしい原爆の犠牲となつたのであつた。かれは一命は取りとめたものの、その日から今日まで病床に日々をすごしつゝあるのである。

去年の秋のたよりにはお諏訪さまの祭りのことが書いてあつたり、自分も杖をついて諏訪神社の裏の森まで、

の消息には「妻はお彼岸詣り出かけ、婚は孫たちをつれてこれもお彼岸空の下を街に出かけました。朝から訪ねて來てゐた碁打ち仲間もかへってしまひ、ぼく一人で留守番をしてゐますが、日本のお彼岸のよさをしみじみ味つてゐます。しかしこのお彼岸のよさもぼくにとつては今年かぎりではないかと思ひます」と書いてあつた。

かれが醫師であるだけに、この手紙の最後の言葉はわたくしの胸を痛めた。自分の病狀についてほとんど無智

であるわたくしたちに比べて、脈搏のかすかな變化にもこまかな感覺を持つ醫師として、宿命的な自分の病態を案ずるであらうかれの心を察するに忍びない。

わたくしたちはこんな場合にどんな言葉をもつて、かれを慰め、かれを勇氣付けなければならぬか。

わたくしたちは病も亦佛恩であることを信ずる。病めるがために人の悲しみを掬み、生きることのありがたさを知ることができる。

もしわたくしたちが健康であつたら浅く、あつさりと人生を見過ごしたであらう。病みしがゆゑに綱島梁川は神を見たのであつた。

わたくしはかく思ふ。しかしかく信じつゝもわたくしの心のなかにはそれを否定せんとする人間の情が動いてゐる。

あの善良な親切な友人が何ゆゑに宿命的な病に苦しまなければならなかつたか？ わたくしは友のために天に向つて叫びたい。

舊約のヨブの物語には七人の子を失ひ、数千頭の家畜を一度に失つた老ヨブの「神われに與へ給ふゆゑに神またわれより奪ひ給ふ」といふ悲痛な信仰が記されてある。

ヨブはこのやうな悟りを持つことができたであらう。しかしかれはまた大地に身を投げ、亡くなつた愛子たちを悲しんで慟哭したことであらう。いかに悟つても人間は人間である。

原の白隠禪洞前の茶店のおばゞは悟りを開いた老婆であつた。おばゞの機鋒はなかなか鋭く、生悟りの雲水などはたいていおばゞの一喝を食つて退散した。

そのおばゞに一人の孫があつた。その孫が死んだ時おばゞは人目もはゞからず嗚咽慟轉して悲しんだ。それを見た近所の者が

「おばゞほどの悟りを開いた人がそのやうに悲しむとはおかしい」といつた。するとおばゞは答へた。

「悟ればこそ泣くんじゃ。生臭坊主なら泣きやせぬ。」

悟れば悟るほど悲しみは深くなり、一層人間的になるであらう。

K氏はわたくしの尊敬する先輩である。

氏の先考は居士ではあつたが若き日の浩川禪師と並び稱されたほどの人であつた。

明治三十四五年のことであつたらうか。K氏の御両親揃つて箱根に滞在中俄かの大洪水のためいたましい死を遂げられ、何一つ形見の品とても發見されなかつた。

一度に父と母とを失つたK氏は傷心の極救ひをもとめて、さる禪師の許に行つて問うた。

「わたくしの父も母も慈悲深く、人にすぐれて信心ふかい人でした。それなのにあのやうな非業の最期を遂げるとは、何ゆゑでせうか？」これに對してさる禪師は

「それは宿業です」と答へた。

しかし禪師の言葉はK氏を救ふことはできなかつた。

K氏は一切を疑ひはじめた。一切を否定した。

或る時氏は「わたしが酒を飲み、花柳の巷に出入りす

るやうになつたのもその時からでした。わたしもあはれむべき宿命の子ですよ」品のいゝ老いの面にさびしい微笑を泛かべながら、かう語つたことがあつた。

しかし今ではK氏も敬虔な念佛行者の一路を精進してをられる。

浄土トラクト

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 一割引
百部以上 二割引

浄土編集部編

信徒必携

一體、浄土宗という宗旨は、どのような事を信條とし、ここに生きる道を求めていくにはどうすればよいのか、又、日々の作法はどうあればよいか、等の間に、びつたりと答えて、浄土の門へ導いてくれるのが、この書である。浄土信徒の會には不可缺のテキスト。青年に勧めても喜んで讀まれる。

藤井實應著

一枚起請文 (寺名等別込み)

宗教史上最短にして最高の指南書として不朽なる一枚起請文を、しみじみ魂に味わせてくれる温さを感じる。

父の童話



幸田文

(講話要旨)

四月八日という日は、佛教徒にとりましては、世尊がお生まれになつたお目出たい日でございますが、この日は、又私にとりましても忘れ得ない日なのです。と云うのは、お釋迦さまがお生まれになつたのとは逆に私の母が三人の小さな子供を残してなくなつた日です。私はこの母の命日には墓地がある池上の本門寺にお参りし、母のめい福を祈り佛陀のご降誕を祝うと云う、ちよつとちよくな氣もちで手を合わせるようになりますが、でもその心の中は、母の死にそれは一人の人がこの世からよ

きたいと考えた末に釋迦經典の教えを知るようになったものと思われまゝ。

いまふりかえつて父をみますると、二十一から筆をとる、八十一歳に終る日まで、その一生は佛教と深いつながりを持ちつゞけました。未だ獨り身であつた二十五歳の頃、すでに「寶の藏」といふ童話の本を書いております。それは佛典のなかの寓話を御伽噺にして判り易く書いたものです。佛典の中には、皆さんもご存知のように例話がたくさんありますが、一面一つ間違えると全く正

り高い世界に旅立つたということ、佛の誕生という偉大な事實がかかつてあつた日との偶然の出あひを考えて、一種の安心感を改めて感ずるのでございます。私の父(幸田露伴)はよく「露伴の人と文學から佛典は切り離せない。」とも云われるように、佛典を文學的に表現することに力をそそぎ、多くの文章にそれが伺えるのは確かです。そのことは父が、人間を書

反對の意味にとられる場合も起りますようです。父が子供たちのため話をするときの難しさを味わつたのも、このところでしょうが。原典の本旨をそのまま持つて來ても、少しも不自然でなしに子供の世界のものとする事ができると云うところでございます。『寶の藏』の中にはこんながあります。

あるところにシシとトラが住んでいました。この二匹は親しみ過ぎず、うと過ぎず仲良くこの世を楽しんでいました。それを見てかくも楽しく過せるシシとトラを羨しく思つたキツネが仲間入りを願ひ出しました。初めのうちは、この三匹は助け合い一そう美しい協同の暮らしをしておりましたが、時がたつにつれ、シシからもトラからも獲物の余りを得られないときは自分でゆかなくてはならないと考えた悪知恵のあるキツネは、シシのところに行つてはトラのことを悪く云ひ、トラのところではシシの悪口を云ひまして、少しでも自分に有利なようにとたくらみました。このためシシとトラが出合い大喧嘩になろうとしました。シシはトラにどのような不満があるかを聞き正さねばと、思いつきそれが總てキツネのつくりごとであつたのを知つたの

です。いくらお人好しのシシとトラでも、大いに怒つて早速キツネを二つに裂いてしまつた。

というのです。この話の中で、父はわが知恵ばかりを頼む者のはかなさを判り易く教えてゐるのです。この童話には別に解説として、佛典の中にはこのように爲になる面白さがあり、決して難しいものではないと書いています。また終戦この方現在に到る世の中にもビツタリくるものにカラスとニワトリの話があります。

タヌキの爲にニワトリがあらかた食殺され、メンドリが一羽になつてしまいました。メンドリはひとりぼっちで、寂しいには寂しいが、食べるに事欠き話す友もなく悲しい日を送つていました。そこに目をつけたカラスが、好き相手とばかり亭主になつて居座り、その間に一羽のひなが生まれました。そのひなの色、形は云うに及ばず、鳴き聲もニワトリとカラスのどつちつかすの「コケツカレ」なのです。「コケツコー」とも鳴けず「カーカー」と云えないひなの悲しさ。

それはひなには何の責任はないとしても、その子の不憫と共に親の悲しさは、決して笑い話しには出來ない現在の世情を映しているようではありませんか。

露伴文學を代表すると云われている「五重塔」にも、

佛典の寓話が引かれているところがあります。今度の全集では今まで知られなかつた、佛典からの童話がいくつも發見されました。大人の文學として多くの教えるところがあります。でも童話から汲み取る子供の心は、大人の考えの及ばない世界を持つているのでしようか。父が童話の筆を折つたのは、私の姉が小さい頃、桃太郎の鬼ヶ島征伐を父から聞き、「鬼が可哀想だ」と泣いたときからと、聞いています。父のことですから、桃太郎はじめ犬、サル、キジ、の正義を愛するさまを充分面白く話したことでしょうが、鬼ヶ島で征伐される鬼も、人間のよるな形をし、人間のような考えや心もち、——それは人間のみにくい一面でしょうが——その鬼が、唯、道德的善惡だけで、死に追いやられるということが、子供心に涙をさそつたものだということです。親鸞上人の「善人なおもて往生す、況や惡人をや」の考えかたですね、それを小さな姉が心に悟つたらしいことから、童話の難しさを感じたといつていました。長いあいだ世の荒波とたたかつて、市井の一文人として生きてきた父も、この姉の鬼へそそぐ涙には、深く感ずるところがあつたのでし

ようが佛教童話に手を染めなくなつたといつても、それは子供向きのものの難しさを認めたのであつて、反つて宗教を文學的に正しく平易に解せることは大切であるとしきりに云つておつたようです。それは父の作品をこらんなればおわかりになりますように、その八十年の一生は、佛典とは切つても切れない間柄にあつたのです。この點に就いては昨年おなくなりになつた齋藤茂吉先生も、露伴の思想、文學は愛と犠牲の精神であると説き起し父の童話の學者とサルとカワウソとウサギの喩を引用していられます。

學問に打ち込む學者をたすけて、サルは木の實、果物をさがして奉り、カワウソはサカナや貝を献じますがウサギは學者の饑を満す何ものもないために唯一つの我が身を燃え盛る火に投じ、その肉で、勉強を續けて下さいと願ふのです。

この犠牲、献身の心はどんな美食にも勝る寶であると申します。そこに貫かれている精神はとりも直さず、露伴文學の精神であるといふのです。(文責記者にあり)

(本文は、傳通院サンガアソカ佛青花祭に於ける講話要旨です。杉本信雄記)



本願への信順

——法然上人「小消息」講義（四）——

佐藤賢順

彌陀の四十八願

話題は淨土教で最も大切な本願のことに移ります。本願とは本來の宿願、根本の理想のことで本誓の重願、弘誓の大願などいわれ、如來が誓われた約束をいふのであります。佛の約束とは何でしょうか。これには一篇の物語があります。無量壽經は主としてこの佛の本願を説いたお經でありまして、ここには阿彌陀佛が四十八の本願を立てられたことが説かれています。今その大要を

諸行の中に念佛を用うるは、かの佛の本願なる故なり。いま彌陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成ぜずといふことあるべからず。本願に乗ずることは信心の深きによるべし。

お話しますと次のようになります。遠い遠い昔、世自在王佛という佛が世に在した頃、一人の國王がありました。この佛の説法を聞いて、自らもまた無上道を證ろうとして、國を棄て王位を捨て沙門となり、法藏と名のりました。大變に優れた素質の沙門でした。ある時、世自在王佛のもとに詣でて、「私はこれから如何なる嚴しい修行であろうとも、成し遂げて正覺を得て、この上もなく妙なる清き佛國を作り上げ、苦しみ悩むすべての衆生を救いたいと願っております。これは私の止み難き宿願であります。それには如何なる修行をいたし、如何なる佛國を作り上げたらよいでしょうか」と教えを乞いました。そこで佛は「大海の水を一人で量ることは容易でないが、それさえも限りなく時間をかけるならば、底を窮めることもできるであろう、それと同じく、眞心をもつ

て精進して道を求めるならば、いかなる目的も必ず遂げることが出来るものである」と勵まして、二百一十億という澤山の諸佛の國土の善い所、悪い所を眼前に現して見せて下された。そこで法藏比丘は、如何なる修行をしたならばこれらの佛土よりも勝った、この上もない立派な佛國が作れるかを、長い間、考えぬいた末に、それらの諸佛の國土の優れた修行の悉くを選び取って、何一つ不足のない完全な國を作り上げよう、と心に誓いました。そして再び佛のもとに詣でて、こういふました、「世尊よ、私は最も優れた佛國を作り上げるために清淨の行を選び取りました。」比丘よ、それはいかなる行か、説くがよい。説いて大衆を喜ばせよ。救いを求める者達は、その法によつて修行をして、所願を満足するであらう。」そこで法藏比丘は言いました、「世尊よ、聽きたまえ。私の所願は次のものであります、私が無上の正覺を得たのちには、私の佛國は次のように優れた功德に満たされるのでしよう」と。そしてその所願の一々を説いたのであります。それが四十八カ條あるところから、彌陀の四十八願といわれています。その一つ一つはみな理想國土の建設のための祈願を宣べたものであって、どれも結構なことばかりですが、特にその中の第十八願は、四十八願の中心で、こゝに如來の本願というものが結晶しているのであります。それは、

もし私が正覺をえて佛となつた後に、いかなる人でも、眞心から私の國に生れたいと欲して、たとひ十度たりとも念佛するならば、必ず生れさせてやる。もし生れないならば、私は正覺をえないであらう。という誓願であります。

「たとひ十度たりとも念佛するならば」というのは、善導大師が明らかにせられたように、「下、十聲に至るまで」であつて、心に佛を念ずることではなくて、口に佛名——南無阿彌陀佛を稱えることであります。如來は、念佛の他に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜とか、慈・悲・喜・捨の四無量心とか、不殺生、不偷盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋意・不邪見の十善とかの、倫理的にも宗教的にも優れた實踐を、淨土往生の行とはなし給わず、口稱名號を淨土往生の行となし給うたのです。すなわち念佛を本願の行として選び給うたのであります。他の優れる諸行を捨てて念佛を用いるのは、念佛が如來の本願の行であるからです。

本願は物語にすぎないか

ところで今お話したような如來の本願は、若い人や一部の教養人に聞かせれば、明らかにそれは一篇の物語にすぎない、釋尊傳記を修飾して、擴大した説話にほかな

らない、と批判されるに相違ないでしょう。この批判は一應受け容れなければなりませんまい。

また法藏比丘が正覺を得て佛國を建設したときには、これこれの結構な功德を備えた國土にしてやろうという四十八の誓願の一々を調べてみると、中には顔貌のことや良い香のことや衣服のことなどが書いてあつて、ああもありたい、こうもありたい、という人間の感覺的な欲望が、物語となつて外に表われて、極樂淨土の有様となつた、すなわち本願は人間の欲望が投影されたのだと考えられる點もあります。「もし私が佛となつた後に、人々が衣服を欲しいと思つたならば、それが直ちにその前に現れて、如法の妙服が自らからだに着いているであろう。もし縫つたり染めたり濯つたりする必要があれば、私は正覺をとらないであらう」(第三十八願)などという本願もあります。これなどは明らかにこの經典できた頃の人々の、感覺的な欲望の表現であつて、こうありたい、ああありたいと望みながらも、實現される見込みのないことが、宗教的な幻影となつて投影されたのであつて、もし科學的に見るならば、こういう批判は正しいといふよりほかはありません。

本願は釋尊傳の再構成であるとか、人間の欲望の投影であるとか、いふ分析や批判は、一面の立場からみて眞實です。その一面の立場とは、科學的、知性的な立場で

あります。今は人間の生き方、考え方といへば、殆んどこの立場にだけ限られているといつてもよいほどなもので、本願を物語と見る見方は、かなり優勢ですが、世の中のこと萬事がこういう知性的な見方で割り切れるわけではありません。むしろそういう見方で割り切れない部分の方が、何十倍か何百倍かであつて、人間的知性の知りうることは、極小部分でありましよう。それにも拘らず、人間的知性によつて一切を割り切ろうとするところに、人間の不幸が生れるのです。本願を物語的構想や人間的欲望の投影であると見てはならないのです。本願は永遠にして常に刻々に生きてゐるもの、形に現わすことができず、しかも現に在るもの、われわれ人間の依り所であり支えであり、それなくしては人間があり得ないものでしかも絶對なるもの、眞現在とでもいふものを、いかに表わしたならよいかを思案した末に、自ら出てきた一番近道な、最も卒直な表わし方があります。これは勿論、象徴的、表象的な表現法であります。數學が數や計算で眞理を表わすように、繪畫が點や線や色彩で美の世界を表現するように、また音樂が音で眞實の世界を表現するように、宗教は必ず形像を用いて形なき眞實の世界を表わすのであります。それは形なき世界の假り形像であり表象でありますが、しかしそういうことを一々裏返えしにして、これは實は假りの形像であるといふこと

を、種明ししゅめいしをすることはなく、ただちにその通りのものとして信ずるのです。言いかえますと、法藏比丘が世自在王佛のみもとで約束された衆生救済の誓願が四十八あって、そのうちの第十八願が、念佛する者は必ず佛の國に生れることができるという念佛往生の本願であるとして、仰信するだけであります。宗教はいかなるものでも、眞理を形像によって表現し、そのままのものとして信ずるところに、特色と力強さを持っております。

現今の若い人や一面的な教養人に、如來の本願ということをお納得させるくらい難しいことはありますまい。それは難中の難事でありましょう。それは科學一邊倒の教養世界へ、哲學や宗教の占めるべき場所を興えていこうとすることの困難さなのです。

今ここに生かされて

本願は阿彌陀佛の四十八願だけではなく、千手觀音の六願・藥師の十二願・釋迦の五百の大願など諸佛諸菩薩にそれぞれ本願があり、悲華經ひけきやうというお經には實にいろいろな澤山の本願が集大成されています。佛の衆生に對する關係は大慈悲による救済でありますから、佛のあるところ必ず本願があるのです。それぞれの佛や菩薩の本願は別願べつがんといって、個別個別の本願として、全體の本願から區別されます。全體の本願とは、總願そうがんといって、「衆

生は無邊なり、誓つて度せんことを願う、煩惱は無邊なり、誓つて斷ぜんことを願う、法門は無盡むじんなり、誓つて知らんことを願う、無上の菩提は誓つて證せんことを願う」という上求菩提じやうきふだい、下化衆生げけしやうじやうの一般的な求道、救済の理想であります。

欲望にはいろいろあつて、感覺的な物欲・愛欲・所有欲や名譽欲のような自己本意の欲望も欲望ですが、人のため世の中のために盡そう、自分を犠牲にしても他人を救おう、という念願も欲望です。この後の方の欲望は衆生救済の願望です。自己本意の欲望は押しつぶされなければなりません、他人を救おうという良い意味の欲望はますます育てられねばなりません。その最も純粹な、最も高度なものが佛の本願であり、佛心であり、大慈悲であり、大悲願であるわけです。

その最も純粹な、高度なものといったところで、われわれ人間の持っている良い意味の欲望を段々と純化して高めていけば、それがやがて佛の大悲本願になる、というような、程度の差だけがあるのではなく、そこには本質の差があるのです。人間の愛情をだんだんふくらませていけば、それが大慈悲になる、というようなものではありません。親鸞しんらんがいつているように、「小慈小悲もなき身にて、有情利益じやうじやうりやくは思うまじ」であります。それだからこそ、法然上人は人間そのものに見限りをつけて、愚

痴の凡夫としての自らの姿に目覺て、一切を如來にお任せしたのです。

ではなぜ本願だとか大慈悲だとか、人間の希望や理想を連想させるような言い方をするのでしょうか。さきほど彌陀の四十八願が形なきものの形像ある表現であつて、こういう表現が宗教の特色である、と申しましたがそれと同じくこれもまた、他にいいようがないので、假りにこんな人間的な希望や愛情を連想させるような、表現をするのです。では本願とは何か。卒直に言えば、それは常に、今われわれを生かし、育て、導いている力があります。現に、此處に、われわれを支え、助け、護っている力があります。かつて、われわれがそれから生れ、やがてまたそこへ還つてゆく大みおやの、絶え間なき働きかけであります。「本願に乗する」というのですから、はかなく、ささやかなわれわれ人間は、この常に刻々に働きかけてくる力の上に、乗っかっているのです。

「法爾の道理」ということあり。炎は空にのぼり、水は下りさまに流る。菓子（果物のこと）の中に酸き物あり、甘き物あり。これはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は、名號をもて罪惡の衆生をみちびかんと誓ひ給いたれば、ただ一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にて疑いなし。」これは上人の名高い法語であります。が、本願による救済は、ありのままの道理であつて確實

で眞實であるといふのです。

花が咲き、鳥が鳴き、水が流れ、火が燃え、雲が動き、風が渡る——平常は全くただの自然現象にすぎません。が、ひとたびわれわれを支え生かし育くみ濟う力に氣がつくときには、すべてが本願の表れでないものではなくなります。花が咲くのでなく花が笑い、鳥が鳴くのでなく鳥が歌い、水が流れるのでなく水が囁くのです。信仰の眼が開け、宗教の世界に生きたのです。○「本願に乗するは信心の深きによるべし」であります。信心の眼が開けてみれば、花が咲き鳥が鳴くという美わしいことだけでなく、病氣や逆境や不運や、時には天災さえも佛の導きとして受けとれるのです。無慈悲もまた慈悲であります。こうして大きな力に包まれ生かされた心安らかな日常生活こそ、如來に歸命した生活で、宗教というものはこの現實を心安らかに明るく正しく生きてこそ値打ちがあるのです。

なお「いま彌陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成ぜずということあるべからず」という一句は、極樂に往生すれば、やがて佛となるのであるから、いかなる所願も満足される、という意味で、この願は佛の本願でなく、人間の願望であります。（未完）

觀經——「落日」——の企畫演出をして

N、H、K、プロデューサー

高 瀬 廣 居

「觀無量壽經」の名は私にとつて小學生時代を想い出させる。眠い眼をこすりながら叔父の寺で、本誌編集部の方氏と木魚を敲いていた頃の記憶は、懐しい。四月八日花まつりの特集を企畫して、さて自分で、この經典を演出するとなると、この頃の想い出に生きてゐるだけではすまされぬ難しいものだつた。何が難しかつたのか。「淨土」の讀者諸彦に御考ともなればと想い、僕のこの經典放送劇の演出についての考へを述べてみる。僕がこの作品を脚色者の須藤氏に依頼する時次の様な考へがあつた。

「經典をドラマタイズする試みは今迄も屢々行われている。例えばこの「觀經」にしても嘗つて五代目菊五郎がカブキの様式美に據つて演じた事がある。一般に佛教に限らず、キ

リスト教にあつても、宗教がその弘法の手段として演劇を巧みに利用した事は多いし、宗教が、その教義、信仰を社會的に發展させる爲に、充分に藝術が、つまり藝術的表現が考慮されていた事、宗教と藝術とが不則の關係にある事、そして宗教はいずれも、その祭典・法儀が、極めて劇的に構成され、崇敬、畏怖・憧憬・救済・法悦等が、宗教的情念の昂まりと共に、教會・寺院という祈りの場に劇的雰囲気をもつて効果的に醸成されている事は確かだ。だから、經典一つをとりあげてもそのドラマ的要素を抽出し構成する事は容易であらう」と、だが、この先入感は、正確なものでなかつた。確に、宗教の儀式には、ドラマに必要な、起承轉結やヤマ場がある。莊重な音楽・歡喜に満ちたコーラス、導師の能

寺からの通信

新しい寺の

行き方(3)

寺院が、どつかり舊習の上にあぐらをかいてゐては教は生きてこない。何とかしてという努力が、教を生かし、人も生き、それ自らも生きてくる。

少しの努力でも工夫でも法流は流れる、流れれば水は腐らない。

×

今月は、一つの行き方として寺からの便りを取上げて三つの例を紹介した。

その一つは、月報として毎月、寺のニュースと福音とを載せて檀信徒に配るもの。茲に東京の隆崇院月報の體裁を見ると、B六、三頁に、住職の挨拶、其月々のことば(聖句)、壇家の投稿、寺務報告、其月のメモ(含、年回法事各家忌日)、連續講話(佛教概論)、寄附名簿、法要案内等が手際良く編輯されている、現在で七四號と言うから、相當なものである。多少の費用がかかるが、ぼつぼつ篤志が自然集つてくるやうでもある。寄附らしい

樂的作法、寺院の建築構造が齋らす冷えびえとした不透明な明るさ、祭壇の白日の様な輝き、苦惱から解脱への誦經、演ずる人々（俳優）と、信仰という紐帶によつて受入してゆく敬虔なる信者（觀衆）との呼吸の一致。それ等は綜合藝術のもつ効果の計算が充分に量られている結晶物である。然も、それは視覺的な美としてでなく、聽覺丈に於いても充分な美を滿喫させるものでもある。しかし、法儀のもつ様式や音響の造型する美は、一定の宗教的な場なり時間を先行條件としている。清淨なもの、絶對的な或る種の觀念が、與えられる。という事實が、いかなる複雑なる事象よりも前に立つてゐる。人々はこの事象を感覺的にも精神の尊嚴性に於ても受けとる事が可能だ。つまり、法式に於ける儀式上の感動力も被訴力も、定められた範疇の上にたつ人々へのエモーショナルなものとして充分にその成果をあげる事ができる。放送劇は、この範疇をもたない。（彼岸會法要の放送はこの範疇が前提としてゐるし、又一切の宗教放送はそうである。）いわば、聴く人々の最大公約數という民衆感情のなかに放たれていく。

いふなれば、俗物性、通俗性にその身を保ち持さねばならぬものであるのだ。

こう云つた事も、スタジオに入つてさて演出となつて氣づいた事でもあるのだが、脚色に當つても、須藤氏に豫め注文した事でもある。僕は、この經典の脚色は、先づ極度の通俗化と人間化が必要である事、素材を極端に劇的にしてしまふ事、つまり主人公のイマイケを救いのない女性としてぎりぎりまでもつてゆく事によつて、佛陀の救いを女人救済という一事に集約してしまひ。その救いを「極樂淨土」という、超越的な世界で音響的に構成する、この三つの點で、この經典の劇化をして賣つた。人間臭が強く人間苦が顯わであればある程、單調な素材や單純な救済の念願が、「佛」という宇宙の眞理體験者の慈悲のもつ尊大な力と對照される。それが、この劇の中心だと考へた。しかし、それでも、聴く人々に一應、間斷なく、マンダラ繪圖を描いてみせなくてはならない。その爲に、音樂によつて、物語りの導入部を常に設定し、その音響的な力で、物語り因果關係を明らかにする。更に一種のリフレインが、ドラマのなか

廣告もある。其が仲々檀信徒間の親しみを加えていて面白い。曰く、果物商〇〇屋新宿へおいでの節はおより下さい云々とある。同じ買うなら、お檀家でという氣も動くし、とかく、寺檀の從の關係は割に深い、横の關係が結び付きにくい現状も、こう云つた所から濃くなつていくのではないか。

その二は、ハガキ通信である。此は相當手軽な所から利用されているが、其だけに中絶しがちで、とにかく、隨時といふより、日を決めて出すという事が決定的な事である。裏面に聖句と簡単な通信、更にペンで個人々々に異つた一筆を添える。面倒だと云つていては其だけの事でしかなくなる。個人の手を出れる所に雑誌にも新聞にもない親身の情が出る。今、この机に載つてゐるのは愛知の藤井實應師のもの、師は方々に巡錫される關係上有縁の人が、全國に散在する。いつも師の口説に接する事が出來えない關係上、この「ハガキ通信」によつて不斷の縁を結び得る。時期に應じた聖句が、根よく、よき筆蹟で油印されてある。又、師の斷想も點在してゐる。その三として、清水の實相寺のハガキ通信

で行われ、イダイケ・アジャセ・ダイバダツタ・釋尊の四者が、絶えず相互關係をもつて人物の背景に四者の影が、オーヴァラップされていなくてはならない。これは、ドラマの不文律であり、ドラマを解り易くする爲の必須要件でもある。そして阿難尊者はこの四者を自在に結合離反させる役割をもつて、常に、四者の重心となつて相關連した働らきを持たねばならない。語り手としての機能は、情景や劇の因果を導き、スケッチする以上に強い役目をもつてゐる。イダイケは阿難と共に在る事によつて佛への轉入が行われ、ザンゲが叫ばれ、無上の至福を與えられている。ダイバダツタは、イダイケの淨土轉入の機根であり、阿難は、このダイバと佛への媒體として、イダイケ・アジャセの象徴的存在でもある。阿難を「語り手」(ナレエーター)とした理由は、この點にある。釋尊の登場によつて、イダイケの人間の俗臭は昂まり、阿難はその役割を終つて釋尊の大いなる存在の影に消え、アジャセとダイバは惡の極限にたつて佛陀の法語のうちに霧散する。この情景は、種々の觀法を詳細に出さない時間上の限界に

もよるが、前述の法儀の造型美を顯わす或る一方法であらうと思う。僕の構成上のねらいは以上の様なものだが、こう云つた解釋と理解が、果して劇の演出に完全に現わし得たかどうかは、なか／＼斷言し得ない。とかく俳優というものは、自分の雰圍氣をもちたがる。老人と云えば、老人の型を造つてしまうものだ。勿論それを全體として一貫したドラマとしての空氣をかもち出すのはプロデューサーの力量であるのだが、ラジオドラマとしての成功が、必ずしも佛典によつてゐるといふ放送の意義を發揮したという事にならない矛盾がある。そう云つた意味から、石井漢氏の人間釋迦の成功が、佛教界の人々にも支持を得たという事を羨ましく思う。今后佛教關係のドラマが行われる機會は餘らないと想うが、讀者諸彦がなにかの機會に、そう云つた意圖をもたれるなら、僕の様な矛盾から先づ一步前進する必要があるうし、それは又、佛教と現代社會との具體的な結びつきがなくては難しいという事でもあらう。そしてドラマの演出には、一つの作品を最低この程度迄一應解釋してからでなくては出来ない。という事を附言しておく。

の形がある。之は表の三分の一の下段に「時間がないのではない。自らの努力、能率、懸命さが足らぬのだ。時間は本當にないと知れ時は刻々と去る。そして命も共に過ぎてゆく。一日たてば一日の生命が。その生命を大切にはぐくもう。時は生命だ。」と言つた句が配され裏面はふつうに隨時使用されている。上例は言つてしまえば簡単なようだが、その持続と、發行の確實性とが大に物を言う。一冊の本一日の説教となるとつい遠のきがちとなる忙しさだが、手軽に手元に置く片々たる通信は、ふと目に留る氣易さがある。

新維持會員芳名 (敬稱略)

北村 貞三郎 (川崎市)
月 窓 寺 (福井縣)
堀 田 良 謙 (靜岡市)
誌上厚く御禮申上げます。

法然上人讃仰會

愚鈍念佛に

生きて

田中 林助

編輯の方から私の信仰について語れと云う事ですが、全くおこがましいことです。特に人様と變つた事もないのです。たゞ激しい私のビジネスの中でも、自分は念佛に生きるといふ自覺が、いつでも、どこでも強く私を支え、活動させてゐるといふ事は、つましい我身の誇りとして喜んでおります。

洵にはづかしいことですが、三十三歳父に死別する時迄は佛法心はありませんでした。私の宅は祖父より父と代々津の天然寺の御世話方をして居りました。特に祖父は老後には毎日寺に参り、方丈様又寺僧の方々と格別懇意でありましたから、私も成長の後は父同様寺の世話方をせねばならないかと青

年時代も時々思つたことはありました。然し青年時代は、營業のこと又漁殺生は實によりき娛樂として居りました。大正七年三月に死別後は直ちに父の跡目を相續致しますと共に寺の世話方も引受ました。

其時淨土宗の最高の念佛行事である五重相傳の式を一週間勤行致しましたので、私も初めて念佛の有難さを體驗させて貰いました。洵に是れが俗に申す御縁を得たと申すのでありましょう。其時に最後の御相傳日に、如來様と御約束致します頂目の殺生禁止は無論であります。私は以來毎日念佛相續を致し居ります。

尙五重相傳の式を二回勸行させて頂きました。二回目は八十代本山猊下岩井智海大僧正様でありました。私は無學の者でありますから御經の研究も出来ません。只五重相傳の節御話し下さつた、愚鈍念佛の一節と一枚起請文の「一念以て往生させて頂くものなり」との信仰です。私等がかれこれ論議をすることはむだのことです。只愚鈍念佛にて往生させ

らるることを確信し、朝夕佛壇の前に如來佛と祖先に禮拜申上ると共に、自分の日々の行動は社會奉仕なりとの觀念を以て一日を喜び、この日暮をさせて頂くことが有難い信仰の御陰であると思ひます。

(本會維持會員・トヨタ重役)

感謝

東京小石川見樹院殿より故住職大河内隆文師百ヶ日供養志納として、本會へ金五千圓也寄附下さいました。茲に誌上感謝の意を表すると共に、追善の誠を謹んで捧げるものであります。

豫告

六月號は時の記念日によせて、佛教のもつ無常という意味(佐藤密雄)、宗教と無常(中村康隆)、佛教藝術に見える無常感(小島章見)、の一連の特輯が盛られており、他の讀物とともに御期待下さい。六月中旬發送の豫定。

淨土編輯部

保育界の問題と佛教徒の自覺

内 山 憲 尚

最近都市の一流新聞は幼稚園の問題を取り上げてゐる。讀賣新聞では、港區のS小學校長が「私立幼稚園の企業化」と明示して、最近入園兒の増加に伴い私立幼稚園は多分に企業化して來た、中には一組六十名もの幼兒を收容してゐるものや、新制高等學校を卒業したばかりの無資格者を採用して、組を擔當させたり、入園料や保育料を無暗に高額にとつたりして、職業化してゐると指摘してゐる。

この言葉は教育者と又責任ある小學校長としては默認し難い言である。よしんば中にその様な幼稚園があるにしても、すべての私立幼稚園がこの様な幼稚園ではない——これについては一二の専門雜誌に反對意見をのべて置いた。

先日也都内の某新聞から電話が掛つて來て最近の私立幼稚園の状態を聞いて來た。その中に「入園料を五千圓も六千圓もとると云うところがあるそうですが、そうですが」との言葉があつた。私は「中にはそんな幼稚園もあります、それは極めて少數の特殊の幼稚園で、そんなのが全部ではありません」と答えて置いた。

しかし、考えて見ると私立幼稚園經營者の中には、非難の對象になるようなものもあることは誠に残念なことである。

二

先日の中外日報が「保育所の幼稚園轉向」の問題をとり上げていた。即ち、最近保育所が幼稚園に切り替へるものが多く、縣によつては厚生課長の机上山をなして居り中にはその轉向を許さない方針をとつてゐると云うところもあるとのことである。

これには種々な原因があると考えられる、共同募金を年に四、五萬圓を貰うために、大に束縛され、或は措置費を受けるために毎月の報告事務が非常に面倒であると云うことの外に、今まで貰えていた、ララ物資の配給がなくなつたこと、幼稚園の方が保育料が多額にとれるということも考慮の中に入れられてゐるのではないだろうか。

なる程保育所の事務報告は實に面倒ではあるが、これも或る程度馴れてしまえば、決つた形式での毎月の報告であるから保母さんにも出来ないことはない。そろばんからの轉向もあるかも知れない。

(經營者が保育園の廢止届けを出した場合

これを許可しないと云うような個人の自由を束縛する権利があるかどうか研究の餘地がある、法人以外の個人の場合には人権侵害になるようにも考えられる。)

三

幼稚園は教育事業であり、保育所は厚生福祉事業であり、自らその目的も使命もちがっているのである。

設立に當つて正しい認識をもつて臨むなれば、途中で轉向をしたり、或は職業的であり金儲け的であるとの非難を受けるようなことは生じない筈である。

佛教徒の、幼稚園保育所は最近非常な勢力で増加していることは誠によろこばしいこといなければならぬ。

しかし、その中で本當に、保育のために精魂を打ち込んでやつている人たちがどの位あるか疑問である。

中には自ら園長として園の經營に當るために、東京高等保育學校の多くの女生徒に交つて若い大學出の住職が熱心に勉學し、或は北海道の自坊に歸り、或は東京に立派な園を建てて、専心保育道に精進されている、誠に賞賛す可き人々もある。こんな人々が宗門の保育界をリードしてくれるなれば、佛教保

育の將來は希望にみちたものがある。

四

現在の社會には、一般から非難されて、企業化した幼稚園と指摘されているものが存在しているのである。

利益のために保育所から幼稚園に切り替えたといわれている保育所が存在するのである。

少くとも、佛教徒の經營している幼稚園、保育所だけは、その中間に入らないようにしたいものである。

尊い佛子を育成すると云う大きな理想の下に、經營者、園長は常に保育道にいそしみ、幼児教育の理論と技術を身につけるよう努力して貰いたい。

保育にも毎日の進歩がある。ただ單に幼児を預かつて、昔のまゝの成人の作つた保育案でしばつたり、毎日同じことをくり近しているようでは世の物笑いとなつてしまうだけである。

佛教的なカリキュラムの下に常に新しい保育理論と保育技術によつて、幼児の生活に即し、幼児の生活を伸ばす、生き生きした、創造の保育が實施されるよう、特に經營者、園長さんたちの理解と精進を切望する次第である。

保育欄

○四月十一日、四天王寺で、全國佛教保育連盟の理事會が開催され、種々本年度の行事等協議された。

○同連盟の第三回全國大會は十一月初旬鶴見の總持寺で開かれる。

○同理事會關東部會が、五月十五日、東京増上寺の明德幼稚園で行われた。

○淨保連全國大會は八月初旬、御殿場で宗務所後援の講習會及會合は名古屋方面で持たれる。

○淨保連東京例會は四月二十七日、赤坂の赤坂幼稚園(阿川貫達先生)であり、新年度及新學期諸行事について意見交換をした。五月は遠足で、其々、新宿御苑潮干狩、湘南巡り、等々出かける由。

○京都に華頂保育短大が生れた。少い淨土宗關係の機關に一俤力を加えた。幼稚園教諭需供のバランスが今では逆であり質を問題としておる今日、同大の努力が望まれる。附屬幼稚園は「バスもある幼稚園」として優秀の尊高き由。此らについては高橋良和氏のリードよろしきものがある。

五月の節句

百田師惠

節句と云えば三月は雛祭、五月は鯉幟、武者人形を飾つた子供の祝日と見做されている。一般に節句は三月と五月であるが、この他に一月一日或は七日、七月七日、九月九日を入れて五節句と云う。埼玉では八月一日を八朔の節句と云う所もある。節とは一年に二十四季節があり季節の變り目で折り目とも云われ、古くよりこの日には物忌が行われた。

五月五日の節句は、端午の節句、菖蒲の節句、男の節句、五日の節句など呼んで居るが、端午とは初五の意味で古く中国に於て五と午の相通じた所から名付けられ、必ずしも五月に限つたことでない。然しこの月が正五九と云つて共に重要な月とされ、季節の折り目の外にキツキつまり出植月といった農事の大切な月であることも意味される。現在この月をイツイツキ、ツツシミツキ、カミサマツキ、オモツキなどと云つて清慎嚴肅に過すべき月

であるとしている所が西日本各地に見られる。なお三月を上巳の節句と云つて辰月である所へ己が重なると厄除目とする如く、五月は午月で音讀で重なるから除日として祓いの日ともされたのである。節句は中國傳來のものとは明かであり、この端午に就いては東晋の頃の行事を語る荆楚歲時記に、この日を藥草とりの日或はそれで編んだ人形を軒にかけて毒氣を祓う日であると云つてゐる。たまこの月は梅雨の月であるため寢具など太陽に曝らしてはならないとされている。斯様に本來は三月三日と同じく祓いの日といった宗教的呪術的行爲の行われる日であつた。

日本では、昔、貴族社會に藥獵として藥草を取る風習があつた。特に菖蒲のことで、和漢合連には「仁德天皇三十九年辛亥、五月始詔獻菖蒲」とあり、公事根源五日節の條に「推古天皇の御宇に始まる」とあるも確證を

得られず、續日本記聖武天皇天平十九年五月庚辰の條に

天皇御南苑觀騎射走馬、是日太上天皇詔曰、昔者五月之節、常用菖蒲爲纒、此來已停、此事從今而後、非菖蒲纒者、勿入宮中。

とあり、「昔は」とあるところから古くこの節のあつたことが推測される。この日の競馬騎射は今日京都の大社の祭禮行事として残されている。

菖蒲を使用する事に就いては西宮記に「五月四日主殿寮内裏殿舍葺菖蒲」とあり、枕草子には、「九重の内をはじめて、いひ知らぬ民のすみかまで、いかでわが許にしげく葺かんと、葺き渡したる云々」とあり、上下一般の風習であつたことを示し、蜻蛉日記には「五月にもなりぬ、我が家にとまれる人のもとより、おはしまさずとも、しやうぶ葺かでは、ゆゑしからんを、いかゞせんとするとは云ひたり。」とある。

斯様に端午の節句は飛鳥朝或はもつと古くより宮中を中心に行われ、平安朝の王朝風俗にもひととき色彩を放つたことが察せられる。然るに時代の變遷によつて鎌倉時代以後は一時衰頽したらしく、建武年中行事には

「五日の節絶えて久し」と記されてある。特に室町時代には華美な生活を續けた將軍の榮華も盡きて、官民共に困窮な生活に追い込まれ、そこに發生したのは迷信的色彩を濃厚にした幾多の民間信仰であつた。それ故に、この長い歴史を持つ節句の行事が見捨てられる筈がなく、徳川時代になると一躍五節句として國家的祝日とされるに至つた。

この日幕府に出仕する者は、諸大名以下殿斗目長袴を着て祝賀を述べ、柏餅を献上し、三家三郷家門等は粽を献上した。特に將軍家で嗣子の誕生があつた年には玄關前に幟を建て、旗奉行が之を掌り、與力同心をして之を警衛させた。また一般には家の軒に菖蒲蓬を葺き、七歳以下の男子のある家では幟、吹流し、鯉幟、その他鐘馗を畫いた四半も建てられた。屋内には座敷幟、冑人形、武者人形、青龍刀などが飾られ、特に初節句と云つて男子が生れた年にはこの日を重んじ、幟や冑人形などを贈つてお祝することが行われるようになった。更に湯屋では菖蒲湯をわかし、その他菖蒲酒、柏餅の風習があり、子供が集つて菖蒲叩きという戯をなしたり、菖蒲で鉢巻をして菖蒲刀という木刀を佩び、粽を食うとか、自然薯、筍、カサゴの乾魚を一つに煮て

食うといった習俗へと變遷していつた。

粽や柏餅に就いては中国に次のような傳説がある。「西紀前二九五年の五月五日楚の國の屈原と云う宮内大臣が、天下の亂れを厭つて汨羅に身を投じた。その後漢の武帝の頃長洲の歐回と云う人がそこを通ると一人の老人が現われて、『私は三閭太夫(屈原の官職名)である。毎年五月五日に皆さんが私を供養して下さるのは誠に嬉しいが、折角の供養物を蛟龍が取つて私が食べることが出来ない。今後は楝樹の葉に包み、五色の糸を以てからんで水中に投げてもらうと、蛟龍はそれを恐れて取らないから私は受取れる』といつて消えた。そこで屈原の姉を初め多くの人は彼の云うがまゝに供養したと云う。」それ故にこの日は屈原の命日に當るのでその供養をする宗教的意味をも含むことにもなる。古來渡船競争の行われたのは屈原を搜索するために出された船に由來すると云う人もある。粽や柏餅は三月の草餅と相通するところがあり、いづれも邪氣祓いを意味するもので、菖蒲や蓬を軒にさすことも、菖蒲酒、菖蒲湯も同様である。

こうした傳説は別として日本に於ては中國傳來の行事とは全く異つた行事が各地の習俗中に見られる。今ではこの節句を一般に男子

の節句と見て居るが、この觀念は江戸時代當りからでさほど古くはない。五月五日と子供の關係を示すものに子供達が二陣に分れて爭う石合戦つまり印地打と呼ばれる行事がある。徳川家康が幼少の頃、安倍川原で見物した石合戦もこの日のことであつたと云う。今でも安房、上總、武藏、上野などの東國の外に讃岐でも行われていたことが報告されている。讃岐の木田郡白山の麓では、子供達が東西に分れて石合戦をし、勝つた方の部落はその年が豊作であるとする作占いの風習があり、この場合菖蒲の鉢巻をして戦うと云う所も多い。石合戦と並んで行われるのは菖蒲を束にしたもので地面を叩き廻る菖蒲打とか菖蒲叩きである。越後の北蒲原郡にその例が見られる。また隣部落と喧嘩をし、やはり負けると作物が悪いと云うなど、田植に先立つ作占いは各地に見られる。これは菖蒲を「尙武」とか「勝負」になぞらえて行われたもので、石合戦に派生したものらしい。

武者人形等は前述の様に江戸中期頃より特に三大都市を中心に部分的に行われたものが、次第に一般化されたもので、前の石合戦に見られる「尙武」或は「勝負」の現われで男の子が強く剛く成長するようにといった意

味にも解されるが、元來は三月の雛人形と同じく宗教的呪術的意味の形代と見られる。また粽は神を招く招代の變化か、忌み籠であることを示すための印であらうと解釋する人もある。この外に見うけられる習俗としては、菖蒲叩きの類型として男女兒入り亂れて互の尻を叩きあうといったことで、伯耆方面にある。伊豆大島の岡田村では、五月四日の胃節句の晩に、家の主人が茅を束ねた棒で主婦の尻を叩きながら「五日のショウブひとしようぶ」と唱える式があつたと云い、この日を女と關係あるように傳えているのは特に注目すべきことである。近松の「女殺油地獄」に「三界に家のない女ながら、五月五日のひと夜さを、女の家と言うぞかし」と見え、他の江戸文藝にもしばしば見られ、今でも愛知、岐阜など中部日本の諸縣や四國の一部徳島縣名西郡で女の家、女の宿、女の夜などの名が残っている。相模の津久井郡では五月五日に菖と蓬とを家のなげしに挿すことを、女の屋根または屋根を葺くといっている。この日は女の威張れる日だと、少しは戦れの氣持も交つて、今も各地に傳えられている。

このようなことからこの日は男の日ではなく、逆に女の日と解されるが、五月は田植月

であるところから女に忌籠りを要請された。すべて年中行事は、明治五年の新曆採用によつて次第に變更され、現在の日によるとその本源的特質とピントがはずれてしまうことが多い。そこでこれら民俗的諸現象はすべて舊曆にもどして考察せねばならぬ點が生ずる。そうすると五月は舊曆の六月に入るので丁度田植時期に入る。昔から田植には女が重要な地位を占め、早乙女の名がのこつている。五月をサツキと云うのは、早乙女、早苗のサと通じ、田の神を意味するものだろうと云われている。田植は單なる農事の一過程だけではなく、重要な祭りであつた。そのために聖なる衣裳のもとに、嚴かな心持をもつて行われなければならなかつた。斯様にして五月のハレの行事の主役が女であると云うところから、この月に女性が予め嚴肅な物忌を要請されたことはむしろ當然と云えよう。月の上弦と下弦には物忌の行事が多いが、古い農事曆に於ては各々相違あり、日は必ずしも一定されて居なかつた。然し段々五月五日に固定されていつたのではないかと考えられる。なお

五月六日に田植を忌む風が關東近邊に見られ信州安曇では六日田と云つている。物忌はこれから云つて一日とは限らず二日乃至は數日

續いたとも云える。更に五月の節句は牛の菖蒲と云つて牛を使つてはならないタブーが山陽方面にあり、牛小屋に菖蒲を葺いて災害除をする。阿波にも牛の正月、またはノッゴ祭と云つて虎杖に蓬と萱をくゝつたものに水を溜き、死んだ牛に供養する村がある。

以上端午に關係ある歴史及び習俗を見て來たが、中國傳來の藥草を使用する風習は一般化され、色々な形に變遷した。然し乍ら田植を前提とする忌籠りが節句に當てられたことは日本獨得なものであり、三月節句に行われて居る磯遊び、山遊びと共に興味深い問題である。今日あらゆる宗教的な年中行事がリタリエーションを加味した習俗と化し、次第にその本質性を失う傾向にある時に、端午の節句と云つた華美なる習俗が、その本來に於て邪氣惡病除と云つた戒いの行事であると共に、農村に於ては豊凶の作占いをする日であつたり、田植前の物忌の日であつたり、素朴ではあるが宗教的意義の深い日であることを各人が認識し、單なる快樂的遊びの日として無駄にせぬよう協めねばならぬ。

(大正大學宗教學研究室副手)

釋尊物語

文學博士

山崎 宏



三、苦行六年

難行

(21)

難行中國の聖人孔子は、年三十にして自立したというが、シッダルタは二十九歳にして出家した。普通の人でも、三十歳前後になると、自分の一生進むべき道を、はつきりと見定める時期である。

十分の自覺を以つて出家したシッダルタは、長い間のわずらわしい御殿生活をはなれ、非常な決心の中にも、一つのよろこびをもつて、近くの森の中に入り、一心に修行を初めた。そこで七日間、シッダルタはわずかな水を飲んだだけで、食物をとらず、一ところに坐つて心を静め、この世の眞理をつかもうと努められた。この間に多分、雨もふり、風も吹き、氣味の悪い獣や、へびなども近ずいたことであろう。これらのことは、今まで何不足ない生活をつづけて來た太子にとつて、たまらないやなこと、あつたにちがいないと思われる。しかし、それらは今、ひたすら道を求める一行者となつたシッダルタには、一向に問題にならなかつた。

こうしてシッダルタは、出家としての自信を得たが、さとりを得るのは容易ではないことを知つた。そこで一たび町に出て、乞食をして廻つた。インドでは、バラモンでも特に出家中は、乞食生活をした。出家に食物を上げることは、一般社會人の義務で、やがてそれは、自分の幸福を得ることとされ、今でもなお、ところによつては、朝は出家のために、よい食事を用意し、乞食に來られるのを待つてゐる程である。

乞食によつて、少し元氣になつたシッダルタは考えた。一人で修行することは、やさしいことではないから、一つ誰か先生についてその教を聞こうと決心し、その頃、有名であつたバツガ仙人はひどい苦行主義の人で、その道場のアヌヤ林はさびしいが、清らかな景色のよいところであつた。

難行苦行は、種姓の如何を問はず、廣くインドの宗教家が實行するもので、かれらは、それによつて魔力を得、死後は天に生れることが出來ると考えた。従つてシッダルタも、少しは苦行について知

つていたが、アマヤ林の苦行を見て驚いた。ものすごい苦行の道場であつた。ある者は、いばらの上に臥し、全身をさされて、どす黒い血を流していた。他のものは、四方に火をたき、上からは熱い太陽の光を、まともに受け、皮は所どころ焼けただれていた。ある者は一本足で立ち止まり、またある者は、長い間さし上げた手がしびれ、もう下すことも出来なくなつていた。この外、首まで水の中にもぐり、地中にうずまるなど、全く見ておられぬ程、氣味悪い有様であつた。そこにシッダルタは、はつきり不自然な、不健全なものであるのを、見抜いた。そこでバツガ仙人に、苦行の意味を問うたが、ただ福を求めるためで、苦行も修養によつては、それ程苦しいものではないと、答えるだけであつた。

アマヤ苦行林で、一時全く失望したシッダルタは、氣をとり直して、今度はガンジス河を渡り、そのころ同河の中流地方にあつて、文化の榮えたマガダ國の王舍城に向つて足をすすめた。その間にだんだんこの氣品の高い出家が、あの有名なカピラ城のシッダルタ太子であることが知れた。そうすると、王舍城でも評判になつて、町まちから多くの人びとが、うやうやしく出迎え、あつく淨飯をささげた。これが自然と、マガダ國王のビンピサーラの耳に入つたので王も是非一つ會つて見たいと考え、ひそかに城を出て、面會したという。

— 苦 行 —

乞食修行する中にも、シッダルタは覺にみちびく心の師を求めて止まず、王舍城を去つて、學徳の高い行者として知られているアーラー・カーラーマ仙人を訪ねた。アーラーラ仙はもう百歳をこえ

た老聖者で、ベーサーリー城の傍に、三百人の弟子と共に、一つの教團をつくつていた。

アーラーラ仙に會つて、シッダルタは落ちついた聲で、先ず鋭い質問をはなつた。

「慾・怒・争い・にくみ、それに生死老死の悲しみと苦しみ、これらのもとを斷つには、一たいどうすればよいか。」

と。アーラーラ仙は、このまじめな一すじの心をもつ高貴な若者を見てよろこんだ。そして自分の修行したことを、こまごまと教えた。

「靜かな所で、外からの不善をはなれ、戒を守り、慾を去り、けんそんな心を以つて、何ごとにもたえ忍び、精神を統一し、ついに無念無想になるように修行されよ、そうすれば、すべての迷を解脱（ときのがれる）することが出来よう。」

と。純情のシッダルタは、ここでこの師から學ぶべきもののあることを知つた。出家として禁すべき、または守るべき戒律や、坐禪すなわち坐つて精神統一する作法などについて、多くの知識と、長い經驗をもつ老仙から、色々と學んだ。

しかし老仙のいう悲想、すなわち無念無想の境地に入るといふことについて、だんだん疑問がわいて來た。それに努めようとするとかえつてそのことにこだわら、さまざまのつまらぬ妄想にとらわれるのである。何ごとも、ごまかしておくことの出来ないシッダルタは、こうした修行では不十分だ、もつと根本的なことから、解決せねばならぬと考えた。

この頃、シッダルタのそばには、故郷カピラ城の父から、遣わされて來た五人の臣がついていた。かれらは初め、淨飯王から太子を

呼びもどす使命をおびて、家來の中から選ばれて、來たものであつたが、氣高いシッダルタの求道の姿に引きつけられ、後を追うて共に、修行するに至つたのである。アーラーラ仙から、學ぶべきものを學んだシッダルタは、この五人の同伴の出家をつれて、老仙のもとを去つたが、その後のシッダルタの修行は、いよいよ眞剣になり、各地の有名な諸仙人に、學道をたずね廻つた。しかし、そのいづれも満足せしめる人はなく、ついに自からさとらねばならぬと決心したシッダルタは、ここに相當はげしい苦行をつまえた。

シッダルタは、このように思惟苦行すること六年間に及んだ。しかし、何も求める覺は得られなかつた。そこでようやくシッダルタは、このような不自然な人間生活と、あまりにもせめられた精神生活とは、決して正しい覺に導くものではない、とゆうことに氣づいたのである。眞直ぐに物を考えられるシッダルタは、こゝろ氣ずくと、靜かに立つて、再び町や村に出て、乞食をされた。この時、五人の伴の出家は、シッダルタが苦行にたえ切れず、とうとう逃げ出したと考へた。

「太子は、だらくした。」

「やはり、もともとが王子だから、心がぐだけたんだ。」

「われわれを、どうするんだ。」

「いや、もう、あんなものと、一しよには居られない。」

五人は怒りとさげすみの目を以つて、シッダルタを送つた。そしてかれらは、鹿野苑とゆうところに行つて、なお、苦行をつづけることにしたのである。

世にゆう釋迦の苦行六年は、さすがにシッダルタの身體をいためた。やせ衰えたシッダルタは、ネーランジャラー河に水浴して、その身を清められたが、力なく、岸の枝にすがつて、ようやく水を出られたという。この時、そこを健康そうな牧場の娘が通つた。かの女の名は善生とよんだが、水邊に、疲れはてた尊い行者の姿を見て大急ぎで、新しく濃い牛乳に、白いもち米をまぜて作つたおいしいおかゆを差し上げた。

シッダルタは、よろこんでそれを受けとられ、それを食べ終ると見る見る中に、元氣をとりもどすことが出來たので、河原に立つ大きなボダイ樹の下に、やわらかい草をしいて、その上にしつかりと足をくんで坐つた。そして、今度こそ正覺を得なければ、この座を立たぬと、心に誓つた。こうしてシッダルタは、靜かに眼をつむられた。

ここに、最後の修行に入つたシッダルタに對して、さまざまの魔王の誘惑が、つぎつぎに加えられたことが、多くのお經や佛畫などに見られる。先ず魔王は、その美しい三人の魔女に、きれいな化粧をさせて、シッダルタのところによつた。三人の若い女の肉體は、あやしくもくねり、心をそるような、みだらな歌をうたつて進んで來た。花のように赤い口びるを、ほころばせながら、あらゆるしなを作つて、行者の心をかき亂そうと努めた。だが、シッダルタの心は不動であつた。これに失敗したと見た魔王は、次にあらゆる奇怪な化物を動員し、八方よりおどしにかかつた。しかし、シッダルタは眉一つ動かさなかつた。いよいよあせつた魔王は、最後に泥の雨火の雨槍の雨などをふらせて見たが、すべてが失敗に終つたと、い

われている。これは清らかな正しい大自然のようによろがるがぬシッダ
ルタの心が、あらゆる世間の誘惑に、打ち勝つたことを、物語る話
なのである。

東の天が白み、曉の空に明星が一つまたたく頃、ネーランデチャ
ー河のさわやかな朝風に吹き消される如く、最後の迷も消え去つて
シッダルタは、はつきりと正しい覺を開いた。生もなく死もなく、
怨も悔もなく、すべてのものがありのままに、何のさわりもこだわ
りもなく、正しくすなおな心にうつつた。今まで、心の底にこびり
ついていたすべてが、ときほどけたのである。そこに心の自由が開
けたのである。曉と共に無明が消え去つていわゆる成道をとげたの
である。

シッダルタは出家以來、修行六年の間に、時どきこうした覺つた
氣持に、ひたつたこともあつた。しかし、それは一部の問題の解決
にすぎず、そのよろこびは一時にすぎなかつた。そこで今度は、自
分の覺りが、全體として深く廣く、完全無缺のものであるか、どう
か、あらゆる角度から、十四日もかかつて、慎重に調べた。こう
して用心に、用心を加えて考えた結果、それが間違ひなく、無上の
正覺であることを確めたシッダルタは、正しく自分が覺者、すなわ
ち佛陀であるとゆう自信を得られた。そしてその法を、世の人のた
めに説くのであるが、これより世人はシッダルタを佛陀とよび、あ
るいは釋迦族の賢者であるという意味から、釋迦牟尼（ムニは賢い
者の意味）といいわが國では一般に、これを略して、釋迦とよぶに
至つたのである。よつてこれから、本書でも改めてシッダルタを、
釋迦とよぶことにしよう。

五、ひろまる佛教

——初めての説法（切轉法輪）——

無上の正覺を得て、佛となつた釋迦は、よろこびに満ちて、いよ
いよ衆生を救わんと、靜かに立ち上つた。世間に出て聞くとともに
よると、前にいくらか教をうけたアトラーラ仙人は七日前に死んだ
という。そこで釋迦は、先ず以前自分のお伴をしていた五人の若行
者を、救おうと考えた。それから、人傳てにかれらが、今のベナレ
ス附近の鹿野苑に、なお苦行していることがわかつた。

釋迦がさとられたところは、今ブツダガヤーとよばれ、記念の大
塔があり、その側に大きなボダイ樹も植えてある。ここより北に向
かつて少し行くと、釋迦が前に六年間苦行をつまれた大苦行林があ
る。釋迦がブツダガヤーを發つて、この大苦行林をすぎた頃、一人
のウバカという外道者に出會つた。ウバカは、清くすんだ空のよう
な釋迦の氣品にうたれ、うやうやしく釋迦にその名を問うた。釋迦
は、

「われはすべてを知り、すべてに勝ち、すべてのものに、こた
わることなる、覺を得ている。誰を師と仰ごうぞ。われに師は
ない。世にわれと等しいものはない。われは無上の師である。」

と、はつきり言われた。これが佛陀としての最切の言葉である。何
と確信に満ちた言葉であらう。もしこれが、平凡な青年出家の言葉
であつたならば、ウバカもあきれたであらうが、練り上げた天才釋
迦の澄み切つた言葉に、ウバカは尊いものを感じ遠ざかる姿を見送
つた。

釋迦はこれから、西方直線に約二百キロの地ベナレスに向かつた

らしい。ベナレスは當時文化の地で、その北方約八キロのところ
鹿野苑とゆう修行林があつて、そこに釋迦と別れた五人の苦行者が
いたのである。釋迦はベナレスに着いて、域内に乞食をしてから鹿
野苑に足を進めた。五人の苦行者は、釋迦がだらくしたと思いこん
で、相變らず無駄な苦行に、日を送つていた。

ところが、ある日の午后、遠くから野路を、落ちついて歩いて來
る釋迦の姿を見た。五人は驚いたが、相談した、だらくしたシッダ
ルタには、迎えたり禮をしたりする必要はないと決めた。しかしだ
んだん近ずいて來る釋迦の姿は、前の記憶よりも、はるかに神ミコごう
しさに満ちていた。そして目の前に、なつかしい釋迦のなつかしい
姿を見た時、思わずいいいに、禮をしてしまった。その後は、前
の約束などすっかり忘れ、一人は衣をとり、一人は乞食鉢を受けと
り一人は坐席をつくり、一人は履物はきものをそろえ、一人は足を洗う水を
くむという有様であつた。

釋迦は、五人を前にして、自から正覺を得て、佛陀となつたこと
をおごそかに宣言し、次いで

「僧たちよ、二つの極端に頼つてはならない。二つの極端の一
つは快樂主義、一つは苦行主義である。これらの二つは、共に
人を不利に導くものである。」

と、最切の說法をされた。これは當時のインド人が、この二つの極
端の何れかに、傾いていたのを戒したもので、中國の聖人子思が、
やはりこのようなことを説いているのと同じである。釋迦は先ず、こ
うしたわかり易いところから切めて、宇宙の本體が有であるとか、
無であるとか、いい張ることの愚を知らせ、空の眞理を説明して行
つた。それから、釋迦の說法は、じゅんじゅんとしてつきず、四
正諦から八正道へと、次第に實行方面に及ぶと、五人の出家は、日

の暮れるのも忘れ、知らず知らず頭をたれ、ひざをにぢりよせて、
有りがたい法に聞き入つたのである。これが有名な切轉法輪キョテツポロリン、すな
わち釋迦の最切の說法で、五人の苦行者はむろん無益の苦行をすて
て、釋迦最初の弟子となつた。



鹿野園遺跡

觀無量壽經より

落日

須藤出穂・作

N・H・K・放送臺本



人物

韋提希い、だいけ

頻婆娑羅王

釋尊

阿闍世

提婆達多

阿難尊者

月光

耆婆

(M (印度風に、神秘的な旋律で))

アナ 須藤出穂作「落日」

(M UP・down・bg)

阿難(うすいユウ)……王妃韋提希よ、泣くがよい、そなたの流す涙は、いつか流れてみほとけのもとにいくであらう。

すすり泣くそなたの聲は、青園堀山あおのくぼりさんにおわします、みほとけのみ心に通うであらう。

韋提希よ、人の世の歎きは深くはてしない、人の世の惡は、うむところを知らない。

韋提希よ、そなたの涙は、そなたの心を洗う露の玉だ涙に洗われた心が、幼な兒の心のように美しくなつたときこそ、みほとけは、そなたの前にうつつのお姿を見せられるであらう……

[M UP・女聲ハミング (韋提希の歎きをあらわして) bg]

阿 難 そなたの夫は七重にとざされた部屋に閉じこめられ、吐く息も絶え絶えだ。父王を閉ぢこめたのは、そなたの生んだ阿闍世だ。その憎しみは北に聳える山々の峽谷よりも深くその心根は、氷河よりも冷たい。

しかし、韋提希よ、阿闍世の父を憎む心とても、そなたの業ではないか

阿闍世が、そなたの身にみごもつたそのときに、憎しみが、彼の中に宿つたのではなかつたか……

[M UP・bg]

韋提希 阿難様、阿難尊者さま、この韋提希をお救い下さいませ、

(すすりなきがら、かすかに)

みほとけにいのる言葉をおおしえ下さいませ。

阿 難 (韋提希の言葉をさえぎるように)

きけ、そなたの子、阿闍世の耳にささやく提婆達多の言葉をきけ。

[M UP・co]

提 婆 (しづかに、ささやく) 阿闍世王何をお恐れになります。

この王舎城に王は一人、あなたこそ、城のあるじでいらつしやる。あつい日を遮ぎる石の壁も、黄金の冠も、城の庭に茂るしゆろの木も、草原を歩む象の群も、みな、あなたを迎えて、よろこびの歌を歌っています。

王よ、なぜ沈んだ顔をなさる。

阿闍世 私は、父を憎む、私は父を憎むために、この世に生れて來たのだらうか。

提 婆 (冷やかに笑つて) 父王は、あなたの敵です。

あなたの前世の人である仙人を殺したのは誰だつたか、それは、あなたもごぞんじの筈です。

阿闍世 しかし、提婆達多、父は、世繼ぎの私を欲しいと願はばこそ、あの仙人を殺したのだ。

提 婆 さよう、あの仙人を殺した夜、赤い日が缺けはじめた夜に母君、韋提希夫人はあなたを身ごもられたのです。

だが、やがて、この世に生れでるあなたが、父君の命を奪うと、あの占い者が言つたとき、父君は、なにをなされ

たのでしよう。

阿闍世 ああ、なんという呪わしい生命だ。

提婆 (聲を鋭くはげまして) 父君は、高殿であなたを生ませた。母の身體を離れたあなたが高殿の下の石だたみの上に落ちて死ぬように……………

阿闍世 父は、私を殺さうとしたのだ。

この世の光を私に觸れさせまいとしたのだ……………

提婆 だが、あなたは、生きています。石だたみの上に落ちても死なずに……………

阿闍世 ……………ああ 私の憎しみも死なずにいる……………

提婆 あなたの小指にある傷は、憎しみのあとです。

その傷のように、憎しみは、あなたの身を離れませぬ。

しかし、王よ、憎しみは、父君と一諸に死ぬのです。父君の生命のある限り、あなたは父君を憎み、父君は、あなたを憎み、この王舎城に、憎しみのよどみは去りませぬ。

(鋭くささやく) 七重に閉ざされた石の壁の底に父君とあなたの憎しみが、生命を終ろうとしています。

その生命の終つたときこそ あなたの心は晴れ、金の王冠は一しお輝きましよう。新しい王、そして、この提婆は釋迦に代つて、新しい佛となりました。

(M

(激しく) プリッヅ]

阿難 さかしい智恵に身を固めた提婆も、憎しみの心に惑う、阿

闍世王も、未だ知らない。

そなたが、何故、ひそかに夜明けに肌をきよめるか。

(M (清らかな水の感じ) ti・bg)

阿難 そなたは一人衣をとぎ、人の眼に觸れさせぬ、そなたの雪

のような肌を露わにして、清らかな水でゆあみする、そして香わしい香りの漂よう豊かな胸をおしひろげて、そなたは、蜜をぬりこめた。蜜に混ぜて練つた小麦の粉は、そなたの胸を白く、汗ばんだようにしめらせた。……………

そなたは 薄衣をまとつて、ただ一人、自分の瓔珞のひびきにさえおびえながら、石の廊下を歩む。

(M (注意深く歩む、サスペンスのある感じ) bg)

阿難 そなたは、七重の扉を一つづつあける。薄衣をまとつて歩

む、そなたを怪む者としてない。夜明けまで眠い目をあけつづけた兵士の前をそなたは、幻のように通りすぎる。

七つ目の扉を開くと、そこにはむくろのようにやせおとろえた、頻婆娑羅王が端坐している。そなたは、おしげもなく、薄衣をかなぐりすてる……………

〔M UP・co〕

韋提希 王様

頻婆 韋提希！

韋提希 王様、召し上りませ

阿難 そなたは、赤兒に乳をふくませるように、王を抱く、王は

赤兒のように、そなたの肌をすすする。

瓔珞にひそませた、すがすがしい葡萄の液が、王の喉をうるおす。

そなたが、再び薄衣をまとうと、王は坐り直して、口をすすぎ、光とともに入り来る目連尊者と富樓那を迎えるのだ。

終日、王は、説法に耳を傾けてあくことを知らない……

〔M (しづかに) ti・bg〕

阿難 頻婆娑羅王の眼はすがすがしく澄み、そなたの肌に盛つた

食物に、身體はやせ衰えても健やかである。

そなたは、しばし、この世の不幸を忘れぬ。子の憎しみが、夫をここに閉じこめていることも……

〔M UP・セグエ、不安に、bg〕

阿難 だが、こうして七日、つづけたそなたの秘密も、今は、空

しい、兵士の一人が、提婆にといつめられて、そなたの秘密を語ってしまった。

きけ、あの足音を、そなたの部屋に近づく、あの荒い足音をきくがいい……

〔M UP・co〕

〔S.E 足音近づく、扉、手荒く開く。〕

阿闍世 母君、

韋提希 阿闍世、何の用です。

阿闍世 母君は、何の爲に……何のために……（怒りのために言葉がつまる）

提婆 王の敵は、母君の敵でもござりましょう。

韋提希 お退りなさい提婆達多、

阿闍世 母君、私の敵にくみするものは、母君たりともゆるしませぬぞ。

韋提希 阿闍世、父王を殺すならば、私も殺すがいい。

提婆 （冷やかに）王様、剣は憎しみを断つこともあります。

阿闍世 母君、生命をいただきます！

〔S.E ヌハを叩く音、〕

月光 (ややオフ) 王様、王様、

香婆 (ややオフ) おあけ下さい。

月光 (ややオフ) 王様！王様！

阿闍世 母君！

[S.E. ドアのこわれる音、]

月光 (オン) お待ち下さい。

阿闍世 はなせ、月光、あつ、なにをする！

月光 恐れながら、王様、昔より、さまざまな悪王があつて、位を奪わんが爲に、父君を殺した例は、一万八千あるときき及んでおります。しかしながら、母君を殺したということ……は……

阿難 だまれ！

月光 だまりませぬ、母君を殺した例は唯の一つもござりませぬ。もし、母君韋提希さまをお斬りになるとすれば、これこそ、インド王族のけがれと申す外はござりませぬ……

阿闍世 えい、はなせと申すに、

月光 はなしませぬ、年老いたといえ、この月光、未だ、力は衰えておりませぬ。

もし、たつて殺すと申されるならば、私ども王様とは思ひませぬ、この王舍城を去つて頂く外はないと申すもの……

阿闍世 えいつ、放さぬか。

月光 放せとおつしやるならば放しましょう。

阿闍世 (荒い息をして) よし、王と思わぬならば、そちらからさきに斬つて捨てよう。

月光 面白い、斬れるものなら、斬つていただきますよう。

阿闍世 香婆、そちは、何故黙つておる、斬れ、月光を斬つて捨てよ。

香婆 恐れながら、王様、劍をお捨て下さいませ。さもなければ香婆が、王様の生命をいただきます。

阿闍世 うゝむ、そちもそむくのか。

香婆 たとへ王様にそむいても、人の道にそむくことは出来ませぬ。

王様、今一度、お考え下さいまし。

[S.E. 劍を投げ出す音。]

阿闍世 (なく) ああ、憎しみを断つ劍と申したのは誰だ！

私は、私は、どうすればいいのだ……

[M (鋭い悲しみの情をこめて) ti・bg]

韋提希 (すゝりなく) あゝ、阿難さま、私は牢の中にとちこめら

れ、王は七重の扉の奥に、饑えております。

阿闍世、お前の母は、私だよ、

阿難さま、私は、阿闍世を憎んではおりません。私は石だたみの上からあの子を拾い上げて育てました。

夫は、子供の大きくなるのを恐れていました。私は、夫が生みの子に殺されるのが、恐ろしかったのでございます。

恐しい、恐しいことでございます。

あゝ、殺されるのは私の夫、殺すのは私の子供……

私は、両方とも愛しております。夫も子供も……

阿闍世、阿闍世、あゝゆるしておくれお父様を殺さないで……

私の胸に抱かれていたお前が、お父様を殺す……

私はこの世で一番大事なものを二つ一諸に失わねばならないのでしょうか。

あゝ、阿難さま、お願いでございます。私をこの世から遠くへお連れ下さいまし、みほとけのそばへおつれ下さいまし、

[M UP(浄土の旋律……かすかに女聲合唱をまじえて)bg]

阿難 韋提希、あの音をきけ

韋提希 (阿難の言葉がきこえない、虚脱したように) 私はもう、

この世の悲しみにたとえられません。

阿難 韋提希、耳をすませてきけ、みほとけが、お見えになつたぞ。

[M UP(莊嚴に)bg]

韋提希 ああ、みほとけさま、

釋尊 (エコー) 韋提希、私の姿が見えるか

韋提希 はい、

みほとけさま、おおしえ下さいまし

私はなんの罪があつて、あの子を生みましたのでございましょう……

なんの罪があつて、こんな悲しい眼に會うのでございましょう……

おおしえ下さいまし、

私は、おうらみ申し上げます。あの提婆達多は、みほとけさまのいとこにあたる人ときいております。

どうしてあのような悪い人をいとこにお持ちになつたのでございましょう……

[M UP・bg]

釋尊 韋提希、そなたに、みほとけの國を見せてやろう。そして

やがてそなたも、彼の國の蓮華の上に坐るのだ……

韋提希 みほとけさま、

釋 尊 韋提希、何も言わなくても、わしにはよく分つている。こ

の世の善も悪も、喜びも悲しみも、愛も憎みも、すべて、わしのそして、生きとし生けるものの胸の中でおこることだ。

そなたの悲しみは、喜びへのみちびきとなろう。そなたの憎みは、愛のあかしとなろう。そなたの罪、この世にみちた悪、それは、みな西の方浄土への道となるのだ。

韋提希、西の方を見るがいゝ、入り日が雲の間に沈み、残つた光が空を七色に彩つている。

すべてのものが、安らかに眠る一とき前のやわらかい光がみちわたつている。

浄土は、あの彼方にある……

[M (女聲ハミング) UP]

釋 尊 韋提希、清らかな水のせゝらぎがきこえるか、天を貫く

樹木が見えるか花園にとびかう島の囀りは、喜びの歌だ。

香んばしい風が、木の葉をそよがせ、池の上にさゞなみを立てる。

きけ。高どのからひびいてくる、天の伎樂は高く低く中空に消えて行く。

[M ファントスティックに、]

韋提希 あゝ、みほとけさま、きこえます。みえます。

釋 尊 韋提希よ、そこはみほとけの國だ。悲しみに打ちひしがれ

大地に身體を投げ出した者に、浄土への道は近い、

韋提希、そなたは、いま、極樂浄土への道を辿ろうとしている。

韋提希 みほとけさま！

釋 尊 韋提希、そのほゝえみを忘れるでないぞ、この世にいて、極樂に遊ぶものゝほゝえみをいつまでも忘れるでないぞ、

[M UP (1ばさく) to・fin]

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上二、八圓
三百以上一、五圓
送、五十部 毎八圓

大野法道著

五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を伝え、どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説されたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本として大へんよろこばれています。

芝園だより

◎風薫る碧空に鯉のぼりの泳ぐ月
幾度逢つても、いくつになつても
しみじみと生甲斐を感じる季節。
人間の世界は、わいる、原子灰、
政争等々で汚れているが、自然の
世界はこよなく美しく、人間のき
たなさをしばし忘れさせる。

◎色々と希望を持つてスタートし
た本年も、依然低迷に終るか、
ひそかに懸念した本誌も、季節の
歩みと共に、大きく、そして力強
く展開しそうな氣運になつて來ま
した。もうしばらく御静觀——吉
田首相的語法でなしに——下さい

◎嬉しいことは眞野先生多年の學
蹟が認められて、學位を得られた
こと。宗門に一律力を加えると共
に、つくく者の何よりの鞭撻とし
て二重の喜びです。(竹中)

◎芝の山は目にしみる様な青葉に
美しい。疲れた目にこよない保養
である。静かな日本では多くの入
々がこの青葉を求めて出掛けて行

く。サテ一步外に出ると、血なま
ぐさい争ひが絶えない。ジュネー
ブの會の行末も混沌としている。
世界の人々は、何處へ行こうとし
ているのであろうか。

◎佛陀の教も、孔子の「仁」も、
こうした人間の争ひに對する無抵
抗の抵抗であつた。力以上の力で
あつた。科學に引きずられる人間
も、もう一度この目に見えぬ力を
自覺すべきなのだが。

◎花まつり放送は好評であつた。
プロデューサーの高瀬氏の骨折で
あつた。此處にその苦心記録と共
に、須藤氏の「落日」をかゝげる
こととする。

◎隆崇幼稚園では、五周年記念が
盛大に行はれた。浮士諸先生の顔
も見えて居た。竹中氏のこのごろ
の活躍は、大したものだ。深川の
正本氏も元氣の顔で大張り切り。
そう云えば、氏の寺も新しい寺の
あり方として近く誌上で紹介した
い。

◎新保義道氏の兼寺喪失。御見舞

します。誌上で發表した清水實相
寺などよい参考として、新建築構
想中とか。(安居)

◎賢順先生の一紙小消息は毎號待
望好評裡に本誌に至りましたが、
ここで暫く静思の時を得て構想を
練つた上で又續けたい、との御申
出により秋まで休載することに致
します。

◎幸田先生の記事は先生並傳通院
サンガアソカ佛青様の御好意によ
りました。御宅は傳通院に近く、
史蹟になつております。

◎右の記者の杉本信雄君は、毎日
新聞の記者として勤務の本誌編輯
スタッフ。

◎四月號に豫告した劇物語熊谷入
道、集團出家は都合により六月號
に掲載します。

◎四月十五日の増上寺御忌晨朝唱
導師は中島眞孝先生であつたが、
之の法要には、芝學園全員も參
列。法要後、椎尾大僧正の法話を
聞いた。

◎前號芝園だより中、大島先生七
回忌とあるは三回忌に訂正しま
す。

◎藤田寛雅氏母堂より來信。氏逝

きて九三年、御子様は其々今年か
ら高校、中學へ進學の由。氏から
竹中さんとバトンを次いで三年と
いう事にもなる。強引に前進して
來たが、之からも宗教雜誌の特殊
性という事を考え、ずん／＼と進
展させたい。こういつた事が可能
なのも全く全會員各位の御力添に
よるものです。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一
年四百圓(千共)。毎號定價三
十圓千四圓、前金切次第清算
通知申上げます。確實便利な
振替を利用して下さい。

「浄土」 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿九年 四月廿五日印刷
昭和廿九年 五月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ

發行所 法然上人鑽仰會
東京都墨田區芝公園五ノ一〇

電話 東京八二一八七番
芝(四三) 一三二八

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八五八

團體宿泊御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます

東京都江東區深川三好町一ノ五、區役所前

長專院

電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管
・光明・芝等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(05)1024(池上驛東3分)

鐵ブランコ2人乗	¥ 12,000
鐵ブランコ3人乗	¥ 14,000
鐵ブランコ4人乗	¥ 22,000
鐵ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。
小田原・熊谷・上浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付